

# あの日あのとき ④

このコーナーは、東日本大震災が発生した当時の様子などを皆さんにお聞きして連載していくコーナーです。

今回は、津波に流されながらも九死に一生を得た、南三陸消防署に勤務する及川淳之助さんに話を聞きました。



**及川 淳之助さん**  
(南三陸消防署勤務)

## 津波接近「とにかく逃げろ！」

私は、南三陸消防署に勤務していますが、あの日は非番だったので本吉町の自宅で地震に遭遇しました。近所の安否を確認し急いで職場に向かうと、同僚が県の庁前で避難誘導をしているところでした。時間は、午後3時30分頃だったと思います。同僚と

一緒に避難誘導をしているとき、ふと南側を見ると家を乗せた巨大な津波がJR気仙沼線の陸橋を超えてこちらに向かってきます。「とにかく逃げろ！」そう言って私は、消防署の2階にある通信室へ駆け込みました。ここなら大丈夫だと思ったからです。

## 引き波で沖合いを漂流

通信室に入ると10秒ほどで海水が建物の中に入ってきました。机に上りましたが、胸のあたりまで水位が上がったとき、窓ガラスが割れて建物の外に投げ出されたのです。「俺の人生は56年で終わったな…」私は、死を覚悟しました。激流の中、タイヤにつかまり小森付近まで流されると、今度は強烈な引き波です。八幡川に沿って、ものすごいスピードで海へ向かって流されました。途中、志津川中学校に大勢の人がいるのが見えたので「助けてけろー！」と叫

びましたが、もちろん無駄な抵抗でした。滝と化した水門から海に落下し、沖合いに出ていきました。嵐のように荒れた海で必死に木材をつかみましたが、次々と押し寄せる津波に何度も海中に沈みました。長い時間沖合いを漂流し、体力も限界です。雪の中「もういいかな…」とあきらめかけたとき、脳裏に家族の顔が浮かびました。「だめだ！死んじゃだめだ！」大きな声を出して必死に木材につかまりましたが、だんだん意識が薄れていきました。しばらくして気が付くと、頭の上の方に杉の木と明かりが見えました。最後の力をふりしぼって助けを求めると、やがて人が近づいてくるのが分かり、抱きかかえられた瞬間、再び意識を失いました。最後に助けられたのは、戸倉中学校のふもとあたりでした。

## 震災で感じたこと

東日本大震災により、10名の署員そしてあまりにも多くの尊い命が失われました。犠牲となられた方々のご冥福を心からお祈りいたします。このような体験をして感じたことは、海の上で命をあきらめかけたとき、最後の力をふりしぼる気力を与えてくれた家族の大切さです。これからは、これまで以上に家族を大事にしていきたいと思います。また、私は南三陸町の人に助けられ、南三陸町で働いています。南三陸町の復旧・復興に向けて、皆さんと一緒に頑張っていきたいと思っています。

## 編集後記

▶こんなにきれいだったなんて…。そう思ったのは、昔好きだったあの子と町で出会ったときではなく、震災直後の電気も水もない生活を送っていた頃のことです。▶当時、私はベイサイドアリーナの裏手にある小さなスペースに、数人で寝泊りをしながら、全国から送られてくる支援物資を搬入する仕事をしていました。朝から晩まで途切れることなく支援物資を積んだトラックが訪れ、自衛隊の皆さんやボランティアの皆さんの協力をもらいながら、夢中で働いたものです。そして、吐く息も白くなる夜遅く。ぐったりして表に出ると、思わず言葉を失ってしまいました。電気がない暗闇で見る星空は、とても近く、とても明るく、これまで幾度となく見てきた星空とは、まるで別世界のようでした。遠い宇宙の星たちが「頑張れよ！」と励ましてくれていたように思ったのです。これから、また寒い季節が訪れます。寒さに負けず、健康に注意しながら、復興に向かってみんな頑張らしましょう。 担当 加藤

## わが家のアイドル



佐藤 <sup>はる</sup> <sup>せ</sup> 春晴くん

(◎沼田)

平成23年3月11日生まれ

パパ 健 司さん

ママ ひろみさん

### おうちの方より一言

我が家の天使♥  
笑顔にみんな癒されています！二人のお兄ちゃんに負けないう、たくましく元気に育てね♥